日本語と脳の構造

市原：この間あるところで石井さんのお話を伺ったのですが、石井さん、ちょっとあのお話をなさっていただけませんか。

石井：あ、そうですか。これは私の研究ではないのですが、東京医科歯科大学の角田忠信さんが「サイエンス」に報告されたものなのです。もう『日本人の脳』という本になって出ていますけれども、人間というのは左の脳で言語を受け取り、右の脳でそれ以外の音声を受け取る仕組になっているのだそうです。ところが角田さんが調べたところによると、日本人だけが鳥の声や虫の音を、言葉を聞く方、つまり左の脳で聞いているというのです。さらに調べてみると、これは日本人の先天的な構造によるのではなくて、日本語を母国語にしているものに限るのだそうです。ですから両親が日本人であってもアメリカで生まれアメリカで育った子どもは、やはり右の脳で鳥や虫の音を聞いているそうです。そして日本人でなくても日本で育って日本語を母国語のように語っているものは、やはり左の脳で聞いているといいます。ということは、日本語が脳の構造を変えているということなのです。

それで、ここからは私の想像になるのですが、日本語が人間の脳構造を変えるというのが科学的事実だとするならば、日本語のどういうところがそうさせるのか、日本語と外国語とを比較してみればわかるのではないかと思うわけです。いちばん違う点はどういうところか。たとえば私はアメリカの方に対して自分を名のるときに、「イサオ・イシイ」と言いますが、こういうふうに相手の立場に立って相手の名のり方で自分を名のるのは、おそらく世界で日本人以外にないのではないかと思うのですが、いかがでしょう。毛沢東も自分を「沢東・毛」とは言わないと聞きました。そういうことが一つあるように思います。

それから、自分を表現するのに相手の立場に立って表現する、つまり、自分の子どもに対して自分を「お父さん」と言い、「私」とは言わないということがあります。甥や姪には「おじちゃん」と言い、孫に対しては「おじいちゃん」、生徒に対しては「先生」というふうに自分のことを言っています。いつでも相手の立

場に立って、そのつど言葉を選んで使っているわけです。

そういうところが、鳥や虫の音を聞く場合にも及んでいるのではないかと思うのです。冬が近づいてくると、こおろぎの鳴く音を聞いても、「つづれさせすそさせ」と、友だちが自分に語りかけているかのような面持で聞く。何でも心情的にそれに同化してしまう。それが日本語の特徴であり、日本人の脳の構造を変えてきた所以ではないのかと考えます。